

UMP モノグラフ第II部の発刊

国際地球内部開発計画 (UMP) は、1962~70年に実施され、日本地球化学会でもこれに参加しました。

日本で得られた成果については、UMP 国内委員会の編集によって、“The Crust and Upper Mantle of the Japanese Area, Part I Geophysics”が、1972年に東大地震研究所からすでに発刊されています。

Part II Geology and Geochemistry の発刊がまれていましたが、1973年6月に地質調査所から出版されました。この2冊でUMPの成果の取りまとめは一応しめくられました。第II部のスタイルは第I部と同じで、その大きさは260×375×20mmという大型になっていて、総頁数は176、図表が多く、英文です。

内容は次のようです。

第1章 岩石および火山	17 頁
第2章 地球化学	16 頁
第3章 構造地質	125 頁
第4章 深層ボーリングのための概査	13 頁
(本島公司)	

「Geology of Kuroko Deposits」

の予約案内

日本の黒鉱鉱床 21 論文、地域地質論文 3、独立論文 16 からなる英文総括集が鉱山地質学会特別第 6 号として出版予定で、今年末までに予約募集中です。A-4 版、410 ページ、厚手表紙、上製本の国際版です。価格は一般 6500 円、学生 5500 円、出版後定価は予約価格の 2 割高を予定されていますので、希望者は同学会事務局へ連絡して下さい。なお、配本は来年 4 月予定です。

連絡先 ☎104 東京都中央区銀座 8-5-4

日本鉱山地質学会 電話 03-573-3997

日ソ シンポジウム延期のお知らせ

ニュース No. 65 にてお知らせしました日ソシンポジウムは、ソ連側の都合により、1974年2月13日(水)~17日(日)、東京で行なわれることになりました。エクスカーションはそのあと、引続いて箱根・大島が予定されています。問合せは下記へどうぞ。

☎113 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学地震研究所 浅野周三

Tel. (03) 812-2111 (内線 6505)

第11回「理工学における同位元素研究発表会」のお知らせ

主催：46学・協会（日本地球化学会をふくむ）

会期：1974年6月17日~19日

会場：国立教育会館（東京、虎ノ門）

発表申込〆切：1974年2月末日

要旨集原稿〆切：1974年4月15日

申込先：東京都文京区本駒込 2-28-45

日本アイソトープ協会内

「理工学における同位元素研究発表会」運営

委員会

詳細は学会事務局に問いあわせて下さい。

九州大学理学部 梅本春次（本学会評議員）氏
11月11日に急死されました。謹んで哀悼の意を表します。

学会事務局 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 38679
日本地球化学会

ニュース (213) 川崎市高津区久本135
発行所 地質調査所 地球化学課
電話 (044) 86-3171
(編集担当) 倉沢一・本島公司
(年5回発行予定)

日本地球化学会ニュース

No. 68

1974. VI. 1

お知らせ

1974年地球化学討論会

主催 日本地球化学会

共催 日本化学会

日時 10月1日(火)~3日(木)

会場 学習院大学南3号館(豊島区目白、国電目白駅下車)

内容 課題討論および一般討論

課題討論 「地球化学と環境問題」

講演申込締切 7月13日(土)

同封の別紙申込用紙(B5)により申し込んで下さい。講演部門はプログラム編成上変更することがあります。講演、討論時間は20分(一般討論)以内です。スライドは35mmに限ります。

「地球化学と環境問題」の課題討論の講演を募集します。またこの課題についての御意見をお寄せ下さい。

講演要旨原稿締切 8月10日(土)

講演申込を受付次第オフセット用原稿用紙をお送り致します。それに黒インクで清書し、下記にお送り下さい。要旨は一般討論は1200字(原稿用紙一枚)以内とします。*

参加費 500円(学生無料)

要旨集代と共に送金されるか、または会場で当日支払って下さい。

講演要旨集代 1,500円(送料共)予約をされ、9月10日までに送金された方には郵送する予定です。

要旨集予約申込締切日 8月10日(土)

要旨集は印刷部数を限定しますので、ご入用の方は参加あるいは講演希望の有無にかかわらず、別紙申込書でお申し込み下さい。

総会 10月2日(水)午後

懇親会 10月2日(水)18時より学習院大学構内で行う予定。会費1,500円(予定)、当日12時までにお支払い下さい。

申込書、要旨集原稿、予約金送付先

☎171 豊島区目白1-5-1 学習院大学理学部

木越邦彦(電(03)986-0221 内線482)

*課題討論講演の要旨原稿については別に連絡を致します。

殿	←要旨集原稿用紙の送り先を記入して下さい。切りとって封筒にはりますのでこの部分のうらには記入しないで下さい。		
	1974年地球化学討論会講演申込書 (〆切7月13日)		
	受付番号*	講演番号*	
	申込者氏名		
	連絡先	郵便番号	電話
	題 演	(200字以内で裏面に要旨を書いて下さい)	
	発表者氏名	(ふりがな講演者に〇印をつけて下さい)	
	希望部門	一般討論	課題討論
*印の所は記入しないで下さい。 申込書郵送先：☎171 豊島区目白1-5-1 学習院大学理学部 木越邦彦			

殿	←郵送希望の方は郵送先を記入して下さい。送金される方は下部の領収書に金額と宛先を記入して下さい。		
	1974年地球化学討論会要旨集予約申込書 (〆切8月10日)		
	受付番号	記入しないで下さい。	
	氏名	所属	
	連絡先	☎	
	懇親会	出席	欠席
	送金額	2,000円	1,500円
	受領書 要旨集代 1,500円 1974年討論会参加費 計 円也領収致しました。 1974年地球化学討論会 責任者 木越邦彦		

1973年度地球化学討論会報告

日時 昭和48年10月1日(日)～3日(水)

場所 秋田市

秋田大学教育学部(3会場)

出席 延約600人

登録 242名(内学生43名)

一般講演 123件

課題討論 1. 黒鉱鉱床の地球化学 講演4件

2. 有機性鉱床の地球化学 講演4件

懇親会 10月2日(火)

秋田大学学生食堂

出席者 115名

(会費 1,500円)

エキスカーション 10月4, 5日

秋田駒ヶ岳, 玉川温泉,

後生掛, 八幡平地熱発電所

参加者 39名

(会費 2,500円)

決算

収入 674,200円

登録料 108,100円

要旨代 467,600円

学会より 90,000円

前年度繰越 8,500円

支出 664,200円

印刷費 175,000円

通信費 127,300円

会場費 49,000円

人件費 165,600円

文具代 33,300円

準備費 106,300円

雑費 7,700円

差引残 10,000円

(次期開催地に申し送り)

(椎川 誠, 岩崎文嗣)

1974～75年度新役員

会長 小穴進也

副会長 本田雅健

監事 西村雅吉

庶務担当 猿橋勝子(杉村行勇, 中井信之)

会計担当 杉浦吉雄

ニュース担当 倉沢 一

編集委員長 増田彰正

財政委員長 金森 悟

行事委員長 山県 登

将来計画委員長 綿抜邦彦

評議員追加選出結果(学会細則による)

鎌田政明, 杉浦吉雄, 杉村行勇, 中井信之の各氏

(ニュース No. 67, 2頁参照)

会費納入のお願い

最近の急激な物価の上昇のために, 地球化学会の運営はますます苦しくなってきました。学会の合理的な運営や学会誌の, より経済的な刊行のために, 担当の各委員は非常な努力いたしておりますが, 地球化学会の運営は窮屈になる一方です。

つきましては, 今後の地球化学会をより計画的に運営するために, 会員各位が, 六月のボーナス期に会費を納入して下さいようお願いいたします。(会費 2,600円/年)

財 政 委 員 会

1974年地球化学討論会講演申込書(〆切7月13日)

受付番号

講演番号

申込者氏名

連絡先

郵便番号

電話

演題

(200字以内で裏面に要旨を書いて下さい)

(ふりがな, 講演者に○印をつけて下さい)

発表者氏名

希望部門

一般討論

課題討論(希望講演時間 分)

* 印の所は記入しないで下さい。

申込書郵送先: 171 豊島区目白1-5-1 学習院大学理学部 木越邦彦

殿

--	--	--	--	--

← 財団希望の方は財団送付を記入して下さい。送金される方は下部の収支計算表に記入して下さい。

1974 年地球化学討論会要旨集予約申込書 (メ切 8 月 10 日)

受 付 番 号		記入しないで下さい。																		
氏	名			所	属															
連 絡 先	<table border="1"><tr><td>〒</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr></table>					〒														
〒																				
懇 親 会	出	席	欠	席	どちらか消して下さい ← ↓															
送 金 額	2,000 円 要 旨 集 + 参 加 費		1,500 円 要 旨 集 の み		な し 要 旨 集 は 会 場 で う け と る															

受 領 書

要 旨 集 代 1,500 円

1974 年討論会参加費

殿

計 円也領収致しました。

1974 年地球化学討論会 責任者 木 越 邦 彦

地化将委新聞

No. 9., 1973年12月
第4次将計委編集

地球化学会の運営組織に ついての疑問

東大震研 佐藤 和郎

この新聞も多分今回で終了しますが、この間に寄せられたいろいろな御意見の中に学会の組織・運営に関するものが余り見当らなかったように思います。そのような意見を期待していた会員の一人として日頃抱えている疑問をこの機会に述べたいと思います。

それは学会の意志決定とそれを実行する機能の関係が明確でないことです。私の理解するところでは、学会の最高議決機関は精神としては総会であるが一年一回の定期総会では実際問題として如何ともしがたいのでこれに次ぐものとして評議員会がある——即ち評議員が事実上の議決機関であり、会則にも「評議員は評議員会に出席し会務を審議決定する」(オ9条)となっているのでしょう。しかし会則のどこを見てもこうして決定したことを実行するとは書いてありません。実行(執行)機関が別にあるかと思えばこれまたどこを探してもないのです。事務局などをどこに置くかという規定はありますがこれだけでは次に述べるように不十分です。

選挙管理委員会の細則以外各種委員会に関する規定は会則にもありませんが、私の想像では正副会長と若干数の評議員およびこれらの委員会が実際には会務を執行していると考えられます。評議員会の性格がこのようにあいまいなので、会の運営を実行面で支える人達の立場もまたあいまいに見えます。規定がないのでこの人達はどこまで義務を負っているのかわかりません。ということは場合によっては相当な“奉仕”を強いられる可能性もあるわけです。我國の学会一般の現状を見れば、運営を円滑に行うには会員の“手べんとう精神”が必要なことは私も否定しません。しかしだからといって人選や仕事の内容を規定しなくてもよいということにはならないでしょう。

会の運営に我々が間接的に参加する手段として評議員を選挙でえらび、選ばれた人達に“一定の”手べんとう奉仕をお願いするための規定がある

のに、そこで決定したことを実行する段階については何も規定せず“不定の”奉仕を期待するだけというのは不合理と思えます。この問題は、実行段階では会員としての判断は何も要らず事務的に処理すればよいものばかりで、だから事務委員を増やせばすむというものでは決まてないのです。自ら計画・立案して評議員会の承認を求め、実行する機能をもった執行機関を設けるべきです。その構成員は何らかの手つぎで会員の意見が間接的にせよ反映されるような方法で選ぶべきでしょう。評議員会にはその名前通りの機能をもたせるべきです。一面、このような組織を有効に運営するためには執行機関の構成員が事務作業に忙殺されることのないよう多少費用がかかっても事務機構を充実させる必要があるでしょう。

こうした学会として当然もつ筈の組織が日本地球化学会発足以来ほとんど整備されず、同好会的前並代性が依然として続いて来たことに対し、「誰かがやってくれるから」とか「人に苦勞させているのだから文句はいわない」式の、逃げの姿勢をとることは、まさに「将来計画以前の問題」ではないかという気がします。

“日本の地球化学”の ある現実

(名古屋) 杉崎 隆一

1954年、地球化学研究会発足後間もない頃の会員数は250名、専門内訳は化学143、地学系70であった(松尾禎士“日本の地球化学”日本の地質学、1968)。1971年7月の地化会名鑑によって筆者が大雑把な内訳をみたところ、国内会員約600人のうち化学系約230、地学系約220であった(残りは地学系其他、乃至は不明)。

角皆(将委新聞 No. 4)のようには地化会は化学と地学のみによる Geochemistry を目的とする会を指向すべきでないことは筆者も全く賛成であるが、上の数字は現実の会についての若干の示唆を与えてくれるように思われる。これらの会員はそれぞれ母体学会としての化学会、地質学会に属している人が大部分であろうから、地球化学会に所屬する化学系会員数と地学系会員数が、

それぞれ化学会、地質学会の中で占める割合を計算すると、化学では1954年1.0%が1971年には0.6%と減り、逆に地質では同じ期間に4.9%から8.0%へと増えている。この数字は上記の期間中に地学系の地化会員が約3倍ふえたのに化学系会員は余り増えていないという事実と共に化学の分野における地球化学の衰退を物語っている。或は柴田雄次のいう「地球とさしちがえる」段階に至る前にうしろの橋を渡って(分析化学や無機化学へ)戻ってしまった(松尾、前出)化学者によるものであろう。一方地学系の会員が増えたのは最近地学の中で占める地球化学の重要性が認められつつあることを示すものであろう。

しかし以上のことは筆者にとって必ずしも喜ばしい現象とも思えない。最近、化学の教室では地球化学の研究室(分析、無機の看板ではあったが)が多数閉鎖されてしまった。一方地質の教室には次々と地球化学の研究室が誕生しているが、そのポストを埋めてゆくのは殆ど「岩石、鉱物」学者である。しかも面白いことには、地化会において地学系と化学系会員数は上記のように半々であるのに、それから選挙されてくる役員は約7割は化学系である。

これらの事実は日本の地球化学というものが非常にバランスを失った荒廃(?)の方向を辿っていることを示していると思われる。このことについては古くからいろいろ論じられてきたことでもあり、その対応策もニュースや将委新聞で提案されている。しかし、問題はそれらが仲々実行されないことにある。筆者は将委新聞をみると、商業新聞の投書欄を連想するものである。また筆者自身の考えは別に述べる機会もあるので触れないが、筆者のこのような地学系、化学系といった区別がなくならない限りは上記のような異常性は解消できないのではないが、「地球物理学会」というものは存続しないにも拘らず、地球物理という分野の中では物理とか地学とかというような専門別は問題にされないという現実には示唆的である。

は面白かったべき+α —— 温泉化学の名譽回復 のために

学殖院大 長沢 宏

「御専門は?」「地球化学です。」「?……ああ、温泉の分析をやるやつですね。」といった会

話をすることはめになることがある。正直のところ何となく心細くなり、「岩石の成因とか、隕石——ほら空から落ちてくるやつがあるでしょう——あんなのを研究しているんです。」とか何とかちよつと云い訳をしたくなる。

地球化学のベシミスティックな現状を代表するものとして「温泉の分析」が引き合いに出されることがある。「温泉」がちょっとばかり気の毒になって来るのは近頃めっきり若い込んで来たせいらしい。

「最近、ボーエンなんて人が云っている玄武岩マグマの分化の現象が起るとすると放射性元素などはどうなっているんでしょうかねえ」「……多分、later stageで濃縮しているんじゃないですか。……U⁴⁺などそんなにイオン半径が大きいわけでもないし……。まあ、とにかく、温泉だのペクマタイトなどの実際の分析値からみて後期での濃縮は間違いないと思います。」

一般に科学では、外的条件の小さな変化に対する目的の性質の変化の追跡が、測定法の精度不足で困難な場合、外的条件の大きな変化に対応する後者の拡大された変化を測定し、内挿によって前者の小さな変化に対応する後者の小さな変化を推定する。温泉も熱水溶液の現象が火成作用の極限的現象であるとするならば上の推論は合理的であるにちがいない。「U⁴⁺、Th⁴⁺のマグマと造岩鉱物間の分配係数の測定値は通常10⁻¹~10⁻³程度と考えられるのでlater stageへの濃縮はかなり著しいはずだ。」と云い換えてみてもし上の答を聞いた人のなっとくの度合は質的に大して変らないであろう。「近いうちに猪根で火山が爆発する気配がありませんか」とか「富士山は大じょうぶでしょうね」などという質問に対する答を引き出すために温泉を頭に浮かべるのは多分自然なことではないかと思う。

「温泉の化学」は地球科学にそれ相当に評価されるべき貢献をして来たと考えた十分な根拠があるように思われる。「温泉の分析をやるやつですね。」と云われたときに感じるヒゲ目は幻想なのであろうか。

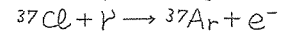
「温泉の分析」と云った当人の立場を考えてみよう。彼は、彼の得意とするこみ入った反応基をもつ化合物の反応を10年/日の如くやっているかも知れない。(有機化学者に何の恨みもないことを断っておきたい。実は、他の分野の化学者あ

るいは物理学者を引き合いに出してもよかったのである。拙稿が有機化学者の目にふれざらんことをヤオヨロズの神に祈りつつ……)もし彼の「温泉の分析」にささかの越えつる響きが届められていたとするならば、これは彼の反応が、化合物が、台所のナベのコーティングのプラスチックの合成に役立ったとか、ブタの脳炎の特效薬になったとかで人類に貢献し、或いはハメット氏の大法則に一致したとかで面目をほどこした事によるものでなければ幸である。不幸にしてそうであったとしたらその原因はどこにあるのであろうか。人類の経済的な向上にあまり縁のない「温泉の化学」の意義を素人にもわかるようにPRする努力が全く不十分にしかなされていなかったためであると私は云い切りたい。しかし、や、複雑な不安が残る。ある研究が進展し、科学のある分野に相当の貢献をしたとする。その研究の上により高度な、より精密な進展をつまかさねる努力を行うのは自然の成り行きでもあり、科学の責任でもあろう。しかし、測定値の精度が上ったり逆に測定値の数が増すことが即ち「研究」の進展であるとは限らない。私自身はと云えば、岩石の科学にわずかではあるが確実に役に立つに違いないと自惚れながら(自分に云い聞かせながら)、もはや「温泉」と化しつつある岩石中の微量元素の分析値をつま上げる努力を、通常は極めて客観的に(時々ベシミスティックになりながら)もうしばらく続けてみようと思っている。

太陽は昔は明るかったか

東大教養 杉本 大一郎

太陽はその中心領域で水素をヘリウムに転換させ、原子核エネルギーを解放している。これに伴ってニュートリノ(ν)が放出されるが、この粒子は太陽内部を素通りして地球に到達する。ブルックヘブンのDavisらはサウスダコタの金鉱の底で、このニュートリノを測定している。すなわち、520トンのC₂Cl₄の中で起る反応、



によって、放射性アルゴンが生成される。³⁷Arは35日の半減期でK電子を捕獲し、³⁷Clへもどるから、その数倍の日数で、³⁷Arの量は平衡値に達することになる。このようにして、タンクの中にたまった数十個の³⁷Ar原子を、ヘリウムの泡を送って集め、濃縮する。これがK電子捕獲の後に放射するX線をカウントして、³⁷Arの量をきめるわけである。

1967年頃から結果が出だしたが、測定が改良

され、バックグラウンドが減少するにつれて、太陽ニュートリノのカウント数の上限値は減少して来た。1973年夏の値は、 $0.2 \pm 1.0 \text{ SNU}$ である。(ただし、Solar Neutrino Unit, SNU = 10^{-36} 反応/sec/³⁷Cl原子。)これに対し、太陽の構造と進化の理論を使って計算される太陽ニュートリノの期待値は7.4~4.8 SNUであり、Davisの実験と矛盾している。

この矛盾を救うのに、理論の方面から、種々のことが考えられた。太陽の中心部が急速に回転していたり、強い磁場が存在する可能性などである。太陽の内部が遠心力や磁場の圧力のためにこれ程の程度のことを考えても、0.8 SNUにしかならない。しかも、このような強い回転や磁場が安定に存在するとは考えにくい。

そこで考えられるのは、「Neutrino decays or the Sun decays」である。前者では、ニュートリノが太陽から地球へ飛んで来る8分間のあいだに、他の粒子へ崩壊するのではないかと考える(Bahcall)。しかし、このような仮説は、実験的に確かめられないという欠点がある。後者では、太陽内部の原子核反応は安定に燃えつづけるのではなくて、時々消えることがあると考える。その原因として、3億年に1度位の割合で、太陽中心部での物質混合があると考える(Fowler, Dillke-Gough, Rood, Ezer-Cameron, etc.)。モデル計算によると、物質混合のあとニュートリノは1 SNU以下に減少する。それと同時に、数百年間にわたって、太陽の光度が数十パーセント減少する。現在は太陽光度が減少している氷河期にあたるというわけである。

それでは、地球が昔は暑かった証拠があるか。化石に沈着した酸素の同位元素比は、海水の温度に依存することが知られている。このことを使って、グリーンランドの海水の温度が、この3千万年の間に下ったという報告がある。火星の運河は、地質学的には、過去に流水があったことを考えさせる。これらの原因はいろいろ考えられるだろうが、最も簡単なのは、太陽が10~20%明るかったとすることである。

太陽が一様に燃えていたモデルでは、太陽は過去45億年の間に40%明るくなったことになる。したがって、20億年より昔は、大気の組成によほどの異常を考えない限り、海水の平均温度は氷点下となり、古生物学の知識と反することになる。これに対し、太陽が点滅しているモデルでは、消えているわずかの時期を除いて、太陽はより明るかったことになり、殆どどの時期に海水は氷点より暖かったことになる。

太陽ニュートリノの測定は、さらに追試がのぞまれる。しかし、この問題には、地球科学からの援助も必要になりそうである。

コスモポリタンとナショナリスト

堀江正治（京大、大津臨湖実験所）

昭和48年の4月末、春もやがて初夏に移ろうとする頃、作家として知られた大佛次郎氏の訃が報ぜられた。私にとっては、氏の死去は48年度中に受けた強烈な衝撃の中の一つである。しかしここには、それには特に触れない。この原稿の御依頼をうけて構想をめぐらせている中に、氏の生涯の歩みを見て独特の感慨のあることに気付いたので、少し語ってみよう。

氏の永眠後、旧記録の幾つかに目を通して、氏に西歐的教養を身につけた、しかしナショナリストであったと一文が私の注意をひいた。この一文が氏の作家としての生き方を極めて端的に位置づけたものとして深く印象づけられたのは私だけであろうか。恐らくはフランス革命やその他の西ヨーロッパの人々の歩んだ歴史の跡を探り、民衆の力によって培われたデモクラシーのあり方の熟考の基礎の上に、思いを幕末から明治初期にかけての近代日本の胎動期、更にはその原動力となった黒船の来航、長州征伐、鳥羽伏見の戦い、薩長連合、江戸開城、北越戦争、会津戦争、西南の役など、ひとひたとして押し寄せる時の流れを静かに洞察している間に、尊王攘夷の旗印の下に大河にのみこまれるごとく糾合していった一世紀前の日本人のナショナリズムに、大佛氏は強い共鳴を覚えたのであろう。こうした日本民族の底流にあるナショナリズム、その根源は天来の島国的環境、一國一民族としての孤立感などにも主要因があるに違いない。一方、こうした日本民族の心は長く外国に滞在し、彼地の古い文化の跡を深く考え、外から日本の国、日本民族を静観してきたような人にしか体得出来ない面の多分にあるという点も見逃すことが出来ない。また在外生活の長期にわたる時、長く異民族との葛藤で裏付けられ、混血の歴史の上に築き上げられてきた国々や国家体制には、日本とは異質の面の少なからざることを痛感する人も少なくあるまい。こうした基盤に立てば日本民族のナショナリズムの傾向へ傾いていく在外生活体験者の多くみられることも肯ける。

私は、若年の頃から、海外に長く生活する機会を与えられ、また最近10年間は国際会議にしばしば出席するチャンスを得て、その都度日本の民族、

文化と外国のそれとの対照、比較を無意識の中に進めてきていた。「古く美しき日本」の再発見、あるいは川端康成や三島由紀夫の文学観の回顧、それらも在外生活の都度、反復して味わってきた点である。しかしその一方、日本人はイミテーションに優れている反面、井の中の蛙に墮して、広く世界を窺、大局的見地から、スケールの大きな研究を達成し得ない、といった批判の正鵠さもしばしば痛感したことである。

私が世話人となって組織している琵琶湖底ボーリング研究グループは発足してから、既に数年になる。この組織、研究テーマの中には地球化学の分野が主要セクションを占めている。数年前、私が本格的にこの研究を軌道にのせる構想を練り始めた時、私が企図し、また現在もち続けている理念の一、二を挙げるならば本当に学問が好きで、一緒に仕事を進められる仲間であるならば、その人達の学歴、経歴などは尚書ではないということ、出来るだけ多くの関係分野の人が学際的に協力して共同の研究成果を挙げるために、仲良く一緒に研究し、何れの国の人に対しても門戸は常に開いておくということにある。世間ではしばしば互いの足をひっぱりあったり、他人の研究活動の自由を制約したりする例がみられるが、私達の組織の中では、そうした弊害を生まないようにお互いが出来るだけの努力を払っていることは特記されてよいと思う。また先に書いたように、日本科学者の陥り易い欠陥にも十分に心を配ってきている、それだけにある意味では他の研究組織には余りみられないような特異なオーガニゼーションでもある。こうした点は学問の世界に生涯を委ねた以上、コスモポリタンであろうとする私の生き方の一面を表しているものでもあろうが、これはまた琵琶湖底のより深層への掘削を人類共通の遺産である学問の発展に役立てるため、将来、国際共同研究計画として発足させようという理念の基礎ともなっている。しかし同時に、この研究組織の運営に当っては、古来多くの困難に打克ってきた日本人の歴史の跡を常にふり返り、他国人に「ヒケ」をとらないような研究活動の主体性を日本科学者の教養と熱情によって保ち続けていこうとする面の強いことも事実である。これ迄の200mボーリング、あるいは次の段階として計画実現を進めている500mボーリング成果を基礎として、琵琶湖で、やがては最終、最大の2,000m級国際共同掘削・分析研究に着手しようとしていること、そこに根ざす日本科学者の主体性、これは研究計画を推進する上での私のナショナリストとしての一面を刻みこんでいる。

国際地質年代学・宇宙年代学・同位体地質学会議

上記会議の概要を第1回サーキュラーによって紹介します。

会議名：International Meeting for Geochronology, Cosmochronology and Isotope Geology

開催地：Paris, France

会期：1974年8月26～31日

組織委員会：会長 Prof. C. J. Allegre

事務局長 Dr. J. Hamet

連絡先 Laboratoire de Géochimie et de Cosmochimie

Institut de Physique du Globe

4, Place Jussieu, Paris, 75005 France

会議は一般講演とシンポジウムからなり、シンポジウムのテーマは、

1. Present status of decay constants (E. Jager, organizer)
2. Radiogenic and stable isotopes in igneous Petrology (M. Javoy)
3. Early chronology of the solar system (P. Pellas)

会議後9月2～7日、Montagne Noire と Pyrénées の地質巡検が行なわれます。講演要旨提出期限：5月15日、講演要旨提出期限：6月15日、地質巡検登録期限：3月31日。

この会議は1967年エドモントン（カナダ）、1969年チューリッヒ・ベルン（スイス）での国際地質年代学会議に続くもので、今回は宇宙年代学、同位体地質学を含む広分野の会議になるようです。サーキュラーの必要な方は小生あて御連絡下さい。

期日が過ぎておりますが、以上ご案内いたします。

（柴田 賢）

寄贈図書

- 粒子トラックとその応用（化学の領域選書6）

阪上正信著 南江堂出版
206ページ 980円

- THEORY OF THE EARTH'S GRAVITY FIELD

Pick, M. J. Picha et al 著 Elsevier 出版
538ページ 12,480円

- THE UPPER MANTLE (Developments in Geotectonics. Vol. 4)

Ritsema, A. R. 著 Elsevier 出版
644ページ 7,470円

国際地球化学探査討論会について

第5回国際地球化学探査討論会が1974年4月1～6日カナダ、バンクーバーにおいて The Association of Exploration Geochemists の主催で開催された。

第5回国際地球化学探査討論会プログラム

- 1) 講演プログラム（省略）

- 2) 日程

Registration 3月31日

4月1日 および2日

特別講演 4月1日 午前

J. S. Webb 教授による "The Regional Geochemical Atlas—A National Catalographic Requirement"

一般講演

4月1日 午後 General Technical Session

4月2日 { 午前 Applications of Statistical Techniques

午後 Primary Dispersion

4月3日 午前 Primary Dispersion
Exploration in Lateritic Terrain

午後 Exploration in Tropical Terrain

4月4日 午前 Exploration in Glaciated Terrain

午後 Analytical Geochemistry

見学旅行

○ Highland Valley の Lornex and Bethlehem Mines
4月4日～5日

○ Island Copper Mines
4月5日～6日

連絡場所

Dr. I. L. Elliott

Falconbridge Nickel Mines Ltd.

1314 West 71st Avenue, Vanc. 14, B. C.
Canada

第6回国際地球化学探査討論会の開催について

1976年8月、オーストラリア、シドニーで開催予定の25th International Geological Congress の1部として6th International Geochemical Exploration Symposium も開催されることが内定している。

（椎川 誠）

* 新 刊 紹 介 *

火成作用—その地球史における展開—

牛来正夫著, 共立出版, 345 頁, 3,000 円 (1973)

著者による「火成岩成因論」上・中・下 3 部作 (1955~58) とその前の「火成岩」(1951) はその普及によって, 一つの新しい学風を確立する先導的役割をはたしてきた。その後, 地球科学が新たな発展をみせるようになった '60 年代頃から, 火成岩の研究も飛躍的に進み, 国の内外の多くの著者や編書 (論文集) あるいはおびただしい論文などの豊富な資料をもとにして, 7 年間の準備期間をおいて成書となったものである。地球の造構造発展過程の中に, 火成作用を位置づけてみよう, そして, その中から, 新しい火成岩成因論を打ち立てよう, ということに執念を燃すことからまとめられたものである。

副題が示すように, 本書は 40 数億年の地球史をとおり, 地球の発展過程の中にもろもろの火成作用を統一的に展開したもので, 著者自ら自負するように, 類書は見当らないようである。内容は, 地球史を大きく 4 分して記述されている, そして 7 つの章に分けて論述している。I. 火成作用と火成論, II. 第 1 時代 (創成時代) における二, 三の問題, III. 第 2 時代 (始生代) の火成作用, IV. 第 3 時代 (原生代) の火成作用, V. 第 4 時代前期 (エオカンギリア紀~古生代) の火成作用, VI. 第 4 時代後期の火成作用 I—中生代を中心とするもの—, VII. 第 4 時代後期の火成作用 2—新生代を中心とするもの—がその内容である。

なお, 本書の結びでは, 今後さらに広い資料, 新しい資料に基づいて, 内容がより客観的なものに書き改められることが望まれる, と記している。この作業仮説の展開のユニークさを知り, 地球化学者としての基礎知識として, この成書を読んでもみることは, 極めて有意義なことである。 (倉沢 一)

日本地球化学会入会

正 会 員 (1973. 12. 8)

月 日	氏 名	勤 務 先	専 門
1973 10. 4	由 佐 悠 紀	京都大学理学部 地球物理研究施設	地 球 理 学
〃	西 村 宏	大阪大学教養部 地学教室	質 量 分 析
10. 15	本 多 朔 郎	秋田大学鉱山学部	鉱 物 学
10. 22	大久保 隆	金沢大学理学部 大学院在学中	放射化学
〃	木 山 到 保	中国工業技術試験 所	応 用 微 生 物

〃	堤 充 紀	山梨県立衛生研究 所	湖 沼 沼 泉 学
11. 5	小 林 公 子	足利工業大学化学 教室	高 分 子 化 学 分 析 化 学
11. 7	島 田 允 堯	九州大学理学部地 質学教室	鉱 床 学
11. 9	新 田 富 也	三井金属鉱業(株) 福岡鉱業所	金属鉱床
11. 21	玉 生 志 郎	東北大学理学部地 質古生物学教室	一般地質

評 議 員 会 報 告 (抜すい)

1973 年 10 月 1 日 (月) 秋田大学 (21 名出席)

- ・JSC 関係: IAGC 加盟が認められた。地球化学・宇宙化学研究連絡委員会が設置される見込みで, 委員数は 10 名以下。・IAGC 関係: 東京シンポジウムの proceedings vol. 2 が出版された。水作業グループの国際相互検定試料について報告があった。
- ・選挙管理委員会による結果がニュース No. 67 のように報告された。
- ・1973 年度総会 (秋田大) の議事内容を審議した (ニュース No. 67 参照)。
- ・1974 年度討論会は学習院大学におねがいし, 木越評議員に一任することにした。

1973 年 12 月 8 日 (土) 名古屋共済会館 (20 名出席)

- ・IAGC 加盟のための予算を政府に要求している。地球化学・宇宙化学研連委員会の予算も請求している。
- ・1973 年討論会の会計報告があった (本号 2 頁)。
- ・地化将新聞は No. 9 で止める。
- ・1974 年討論会は 10 月初旬, 学習院大学で 3 日間の予定。
- ・次期評議員の追加選出: 梅本春次氏急逝のため鎌田政明氏を決定。役員選出細則により会長依嘱の 1974~75 年度評議員として, 杉浦吉雄, 杉村行勇, 中井信之の 3 氏を決定した。・次期 (1974~75) 会務担当を決定した (本号 2 頁参照)。・現在正会員は 734 名である。

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電 話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 3 8 6 7 9
日 本 地 球 化 学 会

ニ ュ ー ス (213) 川崎市高津区久本 135
発 行 所 地質調査所 地球化学課
倉 沢 一
地質部海洋地質課
松 本 英 二
電 話 (044) 866-3171

日本地球化学会 ニュース

No. 69

1974. VIII. 20

国立国会
10. 7. 26.
7777

— 学会プログラム特集号 —

1974 年度 地球化学討論会

主 催 日本地球化学会
共 催 日本化学会
会 期 1974 年 10 月 1 日 (火)~10 月 3 日 (木)
会 場 学習院大学理学部南 3 号館

日 程 表

日	時	9:00	9:30	12:00	13:00	17:30	20:00
		課 題 特 別 講 演 A		課 題 討 論 A 一 般 討 論 B C		総 懇 親 会 (学生食堂)	
1 日 (火)		課 題 特 別 講 演 A		課 題 討 論 A 一 般 討 論 B C		総 懇 親 会 (学生食堂)	
2 日 (水)	受	特 別 講 演 A		課 題 討 論 A 一 般 討 論 B C		Informal meeting の ための時間	
3 日 (木)	付	A 一 般 討 論 B C		A 一 般 討 論 B C			

第 1 日 10 月 1 日 (火)

A 会 場

課題討論特別講演

— (9:10~10:00) —

座長 木 越 邦 彦

A 1 環境の定量化について

(東大工) 市川 新

A 2 Remote sensing—地球環境調査への応用

(地質調) 松野久也

— (10:10~12:30) —

座長 清 水 誠

A 3 マルチスペクトル写真の自然環境調査への応用
(東洋航空事業) °荒木春視, 石川文彦, 松田 徹

A 4 日本物質系における人類活動と自然活動との大い
さの比較

(都立大理) 半谷高久

A 5 準閉鎖系とみなした内湾の汚染

I 準閉鎖系としてみた内湾汚染調査の方法論

- (鹿大理, 鹿大教養) °鎌田政明, 大西富雄
II 鹿兒島湾海水の初期汚染
(鹿大教養, 鹿大理) °大西富雄, 鎌田政明

課題討論

(陸水の重金属汚染)

—(13:30~15:00)—

座長 松 尾 禎 士

- A 6 多摩川水源地域における Sc, V, Co, Se, As, Sb の分布について
(都立アイソトープ総研) °谷崎良之, 永塚澄子
A 7 重金属による底質および土壌の汚染機構に関する一考察
(北大理, 理研, 公衆衛生院) °入江敏勝, 大友幸一, 島 誠, 菅谷順次, 山県 登
A 8 水溶液中での水銀の溶解度
(熊大理) 夷政 勲
A 9 硫黄鉱山廃水の鉄およびヒ素の挙動について
(岩手大教養) 後藤達夫

(陸水の有機物汚染と水質変化)

—(15:15~16:00)—

座長 藤 永 太一郎

- A 10 製紙废水による河床堆積物の嫌氣的分解について
(愛媛大理) 二階堂 要
A 11 都市活動に伴う地下水水質の変動について
(名大理) 杉崎隆一, 藤崎克博

—(16:00~17:10)—

座長 小 倉 紀 雄

- A 12 琵琶湖における富栄養化について
(京大理, 鹿大理) °藤永太一郎, 桑本 融, 小山睦夫
A 13 河川および河口部における自浄作用について(1)
(愛知県公害調査センター) °荻田晴久, 迫水孝文, 久米茂行, 大沼淳一, 荒川幸夫, 森 鎰男
A 14 GC-MS による多摩川水および隅田川水中のフェノール類および芳香族カルボン酸の検索
(都立大理) °松本源喜, 石渡良志, 半谷高久

B 会場

一般討論

—(13:30~14:30)—

座長 兼 島 清

- B 1 湖面と大気間における二酸化炭素の交換速度の季節的変動
(名大理) °小山忠四郎, 西村弥亜, 松田ひろみ
B 2 石こうと水溶液との間のストロンチウムの分配
(東北大教養) 一國雅己
B 3 石灰華のフッ素
(東北大教養) 鈴木勘子

—(14:45~15:45)—

座長 鈴 置 哲 朗

- B 4 天然水中のセレンの沈殿機構に関する一考察
(近畿大理工) 平木敬三, 合田四郎, °玉輝宗夫, 西川泰治
B 5 海水中のセレンについて(そのⅢ)
(近畿大理工) °平木敬三, 由井 収, 西川泰治, 重松恒信
B 5 全蒸発残留物一二成分座標図による水質の検討について
(香川大教養) 糸山東一

—(15:55~17:10)—

座長 一 國 雅 己

- B 7 兵庫県六甲山地表流水中のフッ素の起源について
(大阪市大理) °鶴巻道二, 桜本勇治
B 8 水溶性天然ガス鉱床の付随水とガスの成因的關係について
(名大理) °吉田 裕, 中井信之
B 9 天然水中の水和酸化鉄(Ⅲ)および酸化鉄(Ⅲ)の化学的性質(そのⅢ)
(名大理) °古川征弘, 金森 悟, 北野 康
B 10 水酸化鉄へのケイ酸の吸着およびシリカの生長
(九大理) °樽谷俊和, 加藤晴己

C 会場

一般討論

—(13:30~14:30)—

座長 岩 崎 文 嗣

- C 1 酸性火山岩類における“より定量的な”固化指数について
(京大理, 京都産業大教養) °岡本健二, 能田 成

- C 2 地向斜性火山岩の遷移金属含有量について
(名大理) °川辺岩夫, 杉崎隆一
C 3 ペグマタイト周縁の花崗岩の化学組成
(日本医大, 室蘭工大) 下田信男, °田中裕敏

—(14:15~16:00)—

座長 北 野 康

- C 4 種々の玄武岩中の希土類元素とリンの相関
(都立アイソトープ総研, 神戸大理) °下川利成, 増田彰正
C 5 高圧下における珪酸塩の熔融・固化に伴う微量元素の分配その(Ⅰ)
(地質調, 神戸大理) °田中 剛, 西沢 修, 中村 昇
C 6 海洋性玄武岩中の希土類元素にみられる固体型—液体型の共軛關係
(神戸大理, 都立アイソトープ総研, 同和鉱業) °増田彰正, 下川利成, 地引久和, 名川忠志
C 7 シヤツキー・ライズ附近で採取された試料中のセリウムの異常
(東理大理, 神戸大理, 都立アイソトープ総研) 長沢 繁, 増田彰正, 下川利成

—(16:15~17:15)—

座長 長 沢 宏

- C 8 ガラパゴスの岩石についての希土類元素の地球化学
(東理大理, 神戸大理) 増井直人, 増田彰正
C 9 強リン酸法による岩石中の塩素の定量と日本標準岩石 JG-1, JB-1 の塩素含有量
(金沢大理) 寺田喜久雄
C 10 細分画重液を用いる造岩鉱物分離法
(学芸大) 二宮修治, 小沼直樹

第2日 10月2日(水)

A 会場

特別講演

—(9:30~11:00)—

座長 木 越 邦 彦

- S 1 海底岩石の ^{40}Ar — ^{39}Ar 年代と海底地殻の構造
(東大理) 小嶋 稔
S 2 地球大気の起源と進化(1)—稀ガスからみた
(東大理) 小嶋 稔
S 3 地球岩石中の Common Argon について
(東大理) 兼岡一郎

—(11:00~12:00)—

座長 増 田 彰 正

- S 4 本邦産古期岩類の同位体年代—とくに上麻生礫岩, オーソコーツァイト礫, 水上花崗岩について
(地質調) 柴田 賢
S 5 日本列島の古期岩類—とくに黒瀬川構造帯に産する岩石の地質年代
(京大理) 石坂恭一

課題討論

(沿岸海水の汚染)

—(13:00~14:20)—

座長 杉 村 行 勇

- A 15 東京湾水の栄養塩濃度
(気象研) 杉浦吉雄
A 16 名古屋港水域の底質汚染
(名古屋市公害研) °伊藤和男, 清水節子, 成瀬洋児
A 17 汚染海域における悪臭ガスについて
(中国工業) °塩沢孝之, 木山到保
A 18 沖縄沿岸地域の重金属濃度
(琉球大理工) °大森 保, 兼島 清

—(14:35~15:55)—

(大気・海洋汚染)

座長 杉 浦 吉 雄

- A 19 沖縄の環境と鉛汚染
(琉球大理工) °兼島 清, 大森 保
A 20 大気および降水中の水銀の定量
(北大水産) °小西繁樹, 斎野伊知郎, 西村雅吉
A 21 降水中の SO_4^{--} の由来と大気汚染
(名大理) °中井信之, 竹内丑雄, 高橋直子
A 22 降水中の重金属について
(成蹊小) 竹内丑雄

—(16:10~17:30)—

(大気・海洋汚染)

座長 西 村 雅 吉

- A 23 東京におけるプルトニウムフォールアウト
(地化研究協会, 気象研) 三宅泰雄, °葛城幸雄, 杉村行勇
A 24 東京の大気水蒸気中の ^3H 含量
(地化研究協会, 気象協会, 気象研) 三宅泰雄, 島田利夫, 川村 清, °重原好次

- A25 太平洋海水中の ^3H 含有量
(地化研究協会, 気象協会, 気象研) 三宅泰雄,
島田利夫, 杉村行勇, 猿橋勝子, °重原好次
- A26 太平洋海水の ^{137}Cs , ^{90}Sr 含量について
(気象研, 地化研究協会) °猿橋勝子, 金沢照子,
葛城幸雄, 杉村行勇, 三宅泰雄

B 会場
一般討論

—(13:00~14:20)—

座長 綿 拔 彦 邦

- B11 琉球石灰岩地帯に産するマンガンノジュール中の
元素の垂直分布について
(琉大理工) °平良初男, 兼島 清, 国吉真栄
- B12 琉球石灰地帯に産するマンガンノジュール中の微
量元素の分配
(琉大理工, 名大理) °平良初男,
兼岸 清, 北野 康
- B13 炭酸塩岩中のフッ素の定量
(群大理工) 赤岩英夫, °相沢省一
- B14 炭酸カルシウムによる硫酸イオンの共沈澱につ
いて
(名大理, 島根大文理) 北野 康,
井戸垣正俊, °奥村 稔

—(14:35~15:55)—

座長 金 森 悟

- B15 炭酸塩物質中の SO_4 , Na 含量
(琉大理工) 渡久山 章
- B16 マンガンカルサイトの沈澱にともなう微量元素の
挙動
(東大教養) °高野穆一郎, 綿拔邦彦
- B17 常盤炭田地域から産する炭酸塩岩の鉱物組成と同
位体組成
(東北大理) 平林憲次
- B18 葛生地区炭酸岩石中の微量成分
(地質調) 五十嵐俊雄, 藤貫 正, °細越千恵子

—(16:10~17:30)—

座長 松 本 英 二

- B19 EPR 法による貝殻中 Mn (II) の存在状態の研究
(農工大工, 地調, 東大理) °阿部修治,
藤貫 正, 只野 宏, 藤原鎮男
- B20 化石サンゴの酸処理によるウラン, ^{232}Th , I_0 の
溶出の相違と I_0 年代について
(学習院大理) °満田 伯, 木越邦彦

- B21 表層水における Pb , Po , Th の挙動とその類似性
(噴火湾を実験水域とする海洋の化学的研究III)
(北大水産) °角皆静男, 新里和久,
南川雅男, 野崎義行
- B22 ^{210}Pb および Th 同位体による浅海堆積物の研究
(噴火湾を実験水域とする海洋の化学的研究IV)
(北大水産) °野崎義行, 南川雅男,
日下部正志, 角皆静男

C 会場

一般討論

—(13:00~14:20)—

座長 酒 井 均

- C11 Eu_2SiO_4 , $\text{Eu}_2\text{Al}_2\text{SiO}_7$, EuTiO_3 の合成とそれら
の生成の酸素分圧
(秋田大鉱山) 岩崎文嗣
- C12 超高压下における ZnSiO_3 , Zn_2SiO_4 の相平衡
(岡山大温研) 伊藤英司, °松井義人
- C13 東日本島弧系の火山岩類の酸素同位体組成
(地質調) 松久幸敬
- C14 北海道第四紀火山岩類の岩石化学と Sr 同位体組
成
(地質調, 東大理, 北大理) °倉沢 一,
藤巻宏和, 勝井義雄, 大場与志男

—(14:35~15:55)—

座長 増 田 影 正

- C15 オーストラリア, ベリディル花崗岩の年令と Sr
同位体比
(地質調, A. N. U.) °白波瀬輝夫,
B. W. Chappell, W. Compston
- C16 Hawaiian lerzolute nodule の鉛同位体比および
年代
(東大RIセンター, 学習院大理)
°森岡正名, 木越邦彦
- C17 間隙水組成から推定される浅海堆積物の続成過程
(噴火湾を実験水域とする海洋の化学的研究V)
(北大水産) °野崎義行,
日下部正志, 角皆静男
- C18 塩酸および硫酸による灰長石の分解
(名工大, 東邦大) 神谷 宏,
°今橋正征, 尾崎敦子

—(16:10~17:30)—

座長 後 藤 達 夫

- C19 チタン鉱物の酸による溶解
(東邦大教養) 高橋信樹, 今橋正征
- C20 鉄明礬石の産出とその生成実験
(上智大理工, 東工大工) °林 保,
野村昭之助, 小坂知子, 小坂丈予
- C21 土壌と底質中のセレンの分布
(大阪市衛生研, 愛媛大) °坂野一臣, 立川 涼
- C22 日立鉱山産硫化鉱物のセレン含有量
(岡山大理) °山本雅弘, 上田 晃, 加瀬克雄

第3日 10月3日(木)

A 会場

一般討論

—(9:30~11:00)—

座長 山 県 登

- D1 南極ドライバレーライト谷バンダ湖周辺の鉱物
(東工大工, 極地研振興会) 森川日出貴,
°湊一郎, 小坂丈予, 鳥居鉄也, 大野正一
- D2 南極ドライバレーライト谷バンダ湖の水質の由来
(東工大工, 上智大理工) °森川日出貴,
林 保, 湊 一郎, 小坂丈予
- D3 南極の塩湖の水素と酸素の同位体比と主成分
(岡山大温研, 北大水産, 横浜国大教育, 千葉工
大) °松葉谷治, 中谷 周, 村山治太, 鳥居鉄也,
酒井 均
- D4 昭和基地附近の湖沼水の硫酸分布について
(横浜国大教育) 村山治太

—(11:00~12:00)—

座長 松 久 幸 敬

- D5 Tularosa Basin, New Mexico, U. S. A. にお
ける石膏および水の同位体比
(岡山大温研) °酒井 均, 松葉谷 治,
S. S. Shannon, Jr.
- D6 含水ケイ酸塩鉱物の重水素濃度について
(気象大学校, 信大理, 東工大理) °鈴置啓朗,
黒田吉益, 松尾禎士
- D7 ワイラケイ熱水中の溶存硫酸化合物の同位体比に
ついて
(東工大理) 日下部 実

—(13:00~14:20)—

座長 松葉谷 治

- D8 薩摩硫黄島火山における同位体地球化学 I. 薩摩
硫黄島におけるホウ素の分布
(東工大理, 東工大工) 磯崎昭徳, 吉田 稔,
神崎忠雄, 小沢竹二郎, 垣花秀武
- D9 薩摩硫黄島火山における同位体地球化学 II. 薩摩
硫黄島産ホウ酸中のホウ素同位体組成
(東工大工, 東工大理) °垣花秀武, 野村雅夫,
神崎忠雄, 吉田 稔, 小沢竹二郎
- D10 薩摩硫黄島の火山ガス中の微量成分その1. アル
カリ金属, 鉄, ヒ素の含有量
(東工大理) 小沢竹二郎, °吉田 稔,
ジュワディ, プーピバツタナ

—(14:30~15:30)—

座長 鎌 田 政 明

- D11 薩摩硫黄島の火山ガス中の微量成分その2. 親銅
元素 (Cu , Pb , Zn , Cd) の含有量
(鹿大理, 東工大理) °坂元準雄,
小沢竹二郎, 鎌田政明
- D12 西之島の活動とその噴出物の化学成分
(東工大工, 東工大理) °小坂丈予, 小沢竹二郎,
大平洋子, 平林順一, 湊 一郎
- D13 西之島附近の海面の変色域の海水成分
(東工大理, 日本鑿泉探鉱, 東工大工)
°小沢竹二郎, 吉田 稔, 洪永 大,
小椋英明, 小坂丈予, 平林順一
- D14 西之島附近の海底噴火の変色域に伴う沈殿物につ
いて
(東工大理, 東工大工) °小坂丈予,
小沢竹二郎, 大平洋子, 平林順一

—(15:40~16:40)—

座長 日下部 実

- D15 地熱地体の地球化学的探査一大岳, 八丁原地区の
変質粘土中の B , As , Hg
(九大温研) °古賀昭人, 野田徹郎
- D16 Hg , B , As の気相, 液相間の分配—その地球化
学的応用
(九大温研) 古賀昭人, °野田徹郎
- D17 三原火山の最近の噴火とガスの変化
(東邦大教養) °野口喜三雄, 相川嘉正

B 会 場

一 般 討 論

—(9:30~11:00)—

座長 古 賀 昭 人

B23 琵琶湖の表層堆積物の ^{210}Pb 年代

(地質調) 松本英二

B24 秋田県乳頭温泉群の分類

(中央温泉研) 佐藤幸二

B25 鳴子温泉の水及び溶存成分の由来について

(名大理) °滝本幹夫, 中井信之

B26 玉川温泉 (大ブキ) による岩石の溶出 (続)

(東邦大理, 東工大理) °吉池雄蔵,
岩崎岩次, 吉田征子, 小沢竹二郎

—(11:00~12:00)—

座長 入 江 俊 勝

B27 インドネシアの河川水質について

(岡山大農生研) °小林 純, 森井ふじ,
村本茂樹, 中島 進

B28 北海道, 東北, 北陸及び信越地方の河川水質につ
いて

(岡山大農生研) 小林 純, °森井ふじ,
村本茂樹, 中島 進

B29 精進湖水質の垂直分布

(山梨県衛生研) °堤 充紀, 笠井和平,
中島郁子, 田中正二郎

—(13:00~14:20)—

座長 樽 谷 俊 和

B30 ネパール, ヒマラヤ地域の天然水の酸素同位体比
について

(名大理) 加藤喜久雄

B31 ^3H 濃度による降水の地下浸透量の推定

(学習院大理) °田中邦也, 満田 伯

B32 河川水中硝酸性窒素の紫外吸光光度定量

(群馬公害研究センター) °関口恭一,
原 善彦, 滝島常雄

B33 湧水の pH と炭酸ガス分圧

(小田原城内高, 神奈川温研) °鈴木孝雄,
平野富雄, 大木靖衛

—(14:30~15:30)—

座長 杉 崎 隆 一

B34 広島県下における地下水中の高濃度フッ素につ
いて

(広島県衛生研) 調枝勝幸

B35 鬼無里地すべり地帯の天然水の化学組成

(名大理, 宮崎大工) 北野 康, °中村誠佑

B36 崩壊地地下水の化学組成と流量との関係について

(京大防災研, 神戸大工) °吉岡龍馬,
竹内篤雄, 沖村 孝

—(15:40~16:40)—

座長 本 田 雅 健

B37 青函トンネル坑内水の化学モデル

(函館工専) 水上正勝

B38 骨のマンガン含量およびフッ素含量と年代

(日本医大) 下田信男, °北村泰子

B39 四国, 中国および近畿地方の泥質岩の成熟度

(香川大教養) 稲積章生

C 会 場

一 般 討 論

—(9:30~11:00)—

座長 脇 田 宏

C23 隕石鉱物の酸素同位体組成変動と原始太陽星雲の
不均質性

(Chicago 大, 学芸大) R. U. Clayton,
L. Grossman, T. K. Maeda, °小沼直樹

C24 隕石中の高温鉱物への微量元素の分配 I. 地球上
の試料による分配係数の測定

(学習院大理, 学芸大, NASA/GSFC)
長沢 宏, 小沼直樹, J. A. Philpotts,
D. F. Nava, S. Schuhmann

C25 隕石中の高温鉱物への微量元素の分配 II.

Allende の鉱物中の微量元素

(学芸大, 学習院大理) 小沼直樹, 長沢 宏

C26 Allende 隕石の Nd 同位体比

(東大理) °野津憲治, 馬淵久夫

—(11:00~12:30)—

座長 小 沼 直 樹

C27 コンドライト隕石中の希土類元素の存在度 (Ⅲ)

(神戸大理) °中村 昇, 増田彰正

C28 水溶液による隕石構成物質の分別溶出

(東大物性研) 仁藤 修, °海老原充, 本田雅健

C29 星間塵上の複雑な有機物による 220 nm 吸収

(電通大) °坂田 朗, 中川直哉, 井口哲夫

C30 月面岩石のエロージョン速度

(東大物性研, 立大理) °本田雅健,
今村峯雄, 西泉邦彦

—(13:30~14:30)—

座長 柔 本 融

C31 表層水からの ^{232}Th の除去機構 (噴火湾を実験水
域とする海洋の化学的研究Ⅱ)

(北大水産) °南川雅男, 角皆静男

C32 海洋表層水および底層直上水のラドン分布

(気象研, 地化研究協会) °杉井行勇,
猿橋勝子, 三宅泰雄

C33 東京における降水中の ^{210}Pb 含量

(東海大, 気象研) °植村 斉, 葛城幸雄,
金沢照子, 杉村行勇

—(14:30~15:30)—

座長 野 口 喜三雄

C34 地下水のラドン濃度の変化による地震の予知

(東大理, 原研 R I 研修所, 東大 R I センタ
ー) °脇田 宏, 野津憲治, 中村裕二,
浅田 敏, 野口正安, 森岡正名

C35 瀬戸内海における常量化学成分の分布

(京大理) °柔本 融, 中山英一郎,
国司秀明, 藤永太一郎

C36 初期堆積過程における有機化合物の挙動

(名大理) °西村弥亜, 小山忠四郎

—(15:30~16:50)—

座長 小 山 忠四郎

C37 水圏に存在するステロール類の結合状態について

(都立大理) 小椋和子

C38 湖底堆積物中の不飽和脂肪酸の分析

(都立大理) 山崎正夫, 石渡良志, 半谷高久

C39 湖底堆積物における有機物の変化

(名大理) 半田暢彦

C40 海洋堆物プランクトン起源の溶存有機物の分解と
分子量分布の変化

(農工大農, 都立大理) °小倉紀雄,
安永真理子

215-314

日本地球化学会ニュース

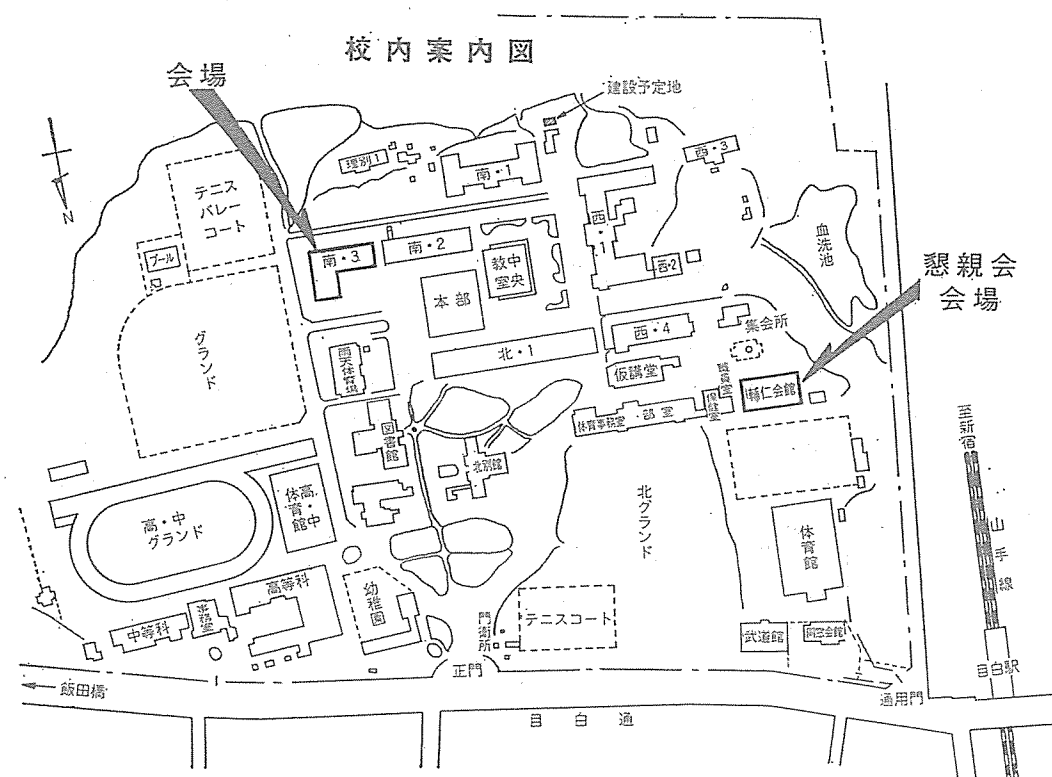
No. 70. 71

1974. XII. 25

国立国会

10. 7. 26.

図書館



総会 10月1日(火)
課題および一般討論終了後A会場で引きつづき行います。

懇親会 10月1日(火) 18:00より
輔仁会館1階食堂で行います。当日ひるまで参加申込受付です。会費 1,500円

参加登録費 500円(学生無料)
要旨代 1,500円(予約のとき)
討論会世話人連絡先
〒171 東京都豊島区目白1-5-1
学習院大学理学部 木越邦彦
(電) (03) 986-0221 内線 482)

交通 国電山手線「目白」下車

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 38679
日本地球化学会

ニュース発行所 (213) 川崎市高津区久本135
地質調査所 地球化学課
倉沢 一
海洋地質部
松本 英二
電話 (044) 866-3171

1974年度総会報告

1974年10月1日, 学習院大学

- 開会
- 議長選出 (半谷高久)
- 会長挨拶
- 大会委員長挨拶
- 1973年度事業報告および会計決算報告
- 1974年度事業中間報告および会計中間報告
- 1975年度事業計画案
- 1975年度会計予算案
- その他
- 閉会

1973年度事業報告

1. 会員現況

		正会員	賛助 会員	名誉 会員	計
1972 年 12 月 末		711	19	1	731
1973 年 12 月	入会	38	3	0	41
	退会	15	2	0	17
1973 年 12 月 末		734	20	1	755

2. 委員会等開催数

総会	回1	財政	回1	環境	回3
討論会	1	行事	3	将来計画	5
評議員会	5	編集	3	選挙管理	2
講演会	2	GDP	0		
例会	3	極地	1		

- 役員選挙 (1974~75年度)
- 会員名簿発行
- ニュース発行 63, 64, 65, 66, 67 計24頁 1000部
- 会誌 GJ. (欧文) Vol. 6/2~4, Vol. 7/1~2 論文19
ノート8 289頁 1100部, 地化(和文) Vol. 6 論文4 27頁 1000部

- 学協会の共催 第10回理工学における同位元素研究発表会(東京)

1974年度事業中間報告

1. 会員現況

		正会員	賛助員	名誉員	計
1974 年 12 月 末		734	20	1	755
1974 年 10 月 現在	入会	39	1	0	40
	退会	8	4	0	12
1974 年 10 月現在		765	17	1	783

2. 委員会等開催数

総会	回1	財政	回2	極地	回1
討論会	1	行事	1	環境	
評議員会	4	編集		将来計画	
例会	3	GDP		会則改正検討	
講演会	1				

- 総会 1974年10月1日 学習院大学
討論会 1974年10月1~3日 学習院大学
3. ニュース発行 68, 69 計12頁 1,000部
4. 会誌発行
欧文誌 Vol. 7/3~4, Vol. 8/1~2
論文17 Note 3 255頁 部数1,100部
邦文誌 Vol. 7/8 合併 論文2 その他 101頁 1,000部

- 学協会共催
1974年6月, 第11回理工学における同位元素研究発表会
- 例会内容
1974年
●2月16日(土) (東大化学)
・シエラネバダ山中における鉛汚染について

青学大 平尾 良光

● Ar-40/Ar-39 法の発展とその応用

東大理 兼岡 一郎

● 6月8日(土) (東大化学)

● Distribution of nutrient matters in the saline lakes of the Dry Valleys.

千葉工大 鳥居 鉄也

● Stable isotope studies of the salts and water from Lake Vanda.

名大理 中井 信之

● Strontium isotope studies of the Ross Island volcanics.

地質調 倉沢 一

● The distribution of secondary minerals at Lake Vanda.

東工大 森川日出貴

小坂 丈予

● Geochemical aspects of various minerals found at Lake Vida.

東大教養 綿抜 邦彦

東工大 森川日出貴

● 9月5日(土) (東大化学)

● Public health hazards of lead pollution.

カリフォルニア工科大

C. C. Patterson

1975 年度 事業計画

1. 総会 1回
2. 討論会 1回
3. 例会 3回 講演会 1回
4. 評議員会 4回
5. ニュース発行 5回 24頁 1,000部
6. 会誌発行
G.J. (欧文) Vol. 9/1~4 200頁 1,100部
地化 (邦文) Vol. 9 40頁 1,000部
7. 会員名簿発行 1975年8月配布
8. 1976-77年度役員選挙 1975年9月

1973 年度 会計決算報告

(1974. 2. 16)

収 入

(73年度予算)

前年度よりの繰越金	2,757,170 円	620 千円
正会員費	1,466,853(86%)	1,200
賛助会員費	130,000	200
購読料	1,081,448	950
別刷代	728,891	800
広告代	65,000	150
刊行補助金	0*	100
利 息	33,890	
寄 付 金	1,282	

合 計 6,264,534 4,020

* '74年はじめに 27 万円入金

支 出

(73年度予算)

会誌印刷費	2,651,202円**	2,400 千円
ニュース印刷費	125,400***	120
郵送料	362,550	350
人件費	350,000	350
編集費	30,000	60
討論会補助	70,000	70
委員会活動費	10,000	20
会場・会議費	116,098	100
講師謝礼	23,000	20
事務費	156,130	150
会員名簿代	385,000	230
銀行等手数料	41,940	50
同位元素発表会協賛金	2,000	予備費 100

合 計 4,323,320 4,022

差引残高 1,941,214 円

内訳:

銀行預金	1,417,249 円
郵便振替	490,055
現 金	33,910

1,941,214

** G.J. 6~2,3,4 7~1, 地化 6~1, および別刷代

*** No. 62,63,64,65,66

1974 年度 会計中間報告

(1974. 1. 1—8. 15)

収 入

1974 年度予算

前年度よりの繰越金	1,941,214 円	0 千円
正会員費	466,641	1,738
賛助会費	140,000	100
購読料	1,054,751	1,252
超過頁代別刷代	1,057,460	1,040
広告代	0	150
寄付金(秋田大より)	140,000	—
刊行補助金	270,000	270
銀行利息	6,732	—

合 計 5,076,798 4,550

支 出

1974 年度予算

会誌印刷費	3,893,063 G.J. 7 (2,3,4) 8 (1) 地化, 7/8 と 別刷 7 (23,4)	2,600 千円
ニュース印刷費	98,000 No. 67, 68	160
郵送料	237,630	450
人件費	218,680	420
編集費	30,000	60
討論会補助金	100,000	100
委員会活動費	0	20
会場費会議費	42,030	120
講師謝礼	14,000	20
事務費	20,340	200
銀行等手数料	17,360	50
同位元素研究発表会など	2,500	予備費 350

合 計 4,673,603 4,550

差引残高 403,195

内訳:

銀行預金	366,471 円
郵便振替	36,465
現 金	259

403,195

1975 年度 会計予算

(1975. 1. 1—1975. 12. 31)

収 入

前年度繰越金*	200 千円
正会員費	2,860
賛助会費	410
購読料	1,550
刊行補助金	300
超過頁代別刷代	240
銀行利息	50
広告代	100

合 計 5,710

* 昨年度計上した名簿代積立金

支 出

会誌印刷費	2,820 千円
ニュース印刷費	250
郵送料	800
人件費	480
編集費	80
討論会補助金	130
委員会活動費	20
会場費会議費	150
講師謝礼	30
事務費	200
銀行等手数料	50
名簿代	500
予備費	200

合 計 5,710

会費購読料の変更について

1974 年 10 月 1 日の総会において、会則第 6 条改正が承認され、それに伴い、1975 年度以降の会費・購読料を下記のように変更します。

	国 内	在 外
正 会 員	4,000 円	20 米ドル相動額
費購読料(一部)*	1,300 円	8 米ドル相動額

* 据置

評議員会報告

(議事録が承認されたもの)

1974年6月8日(土) 東京本郷学士会館分館
(23名出席)

1. ISC 関係

- ・学術会議に地球化学・宇宙化学研究連絡委員会設置のために、同会議から6万円の予算を支出し、その範囲内で、従来の合同委員会と連絡をとることになった。
- ・学術会議総会(4月末)で、IDOE(国際海洋研究10年計画)の実施を政府に要望することが決議され、内閣総理大臣宛勧告文が出された。また、日本分析化学研究所問題に関係して、日本学術会議に環境放射能検討小委が設置され、審議結果にもとづいて、放射能調査の体制に関し政府に申入れをした。1975年日本学術会議の主催予定の国際環境会議に先立ち、国内シンポジウムがこの6月13~15日の3日間日本学術会議で開催されることになった。

2. IAGC 関係

- ・前回評議員会で報告された IAGC 情報のうち「Kimberlite Conference を2~3年のうちに日本がハワイで開きたいとの意向がある」とあるのは「昨年ケーブタウンで開かれたようなタイプの Conference を2~3年のうちに…」と訂正された。

3. 各委員会報告

- ・編集委員会
G. J. Vol. 8, No. 1 は配布済み, No. 2 は再校が終了6月中旬に発行予定, No. 3 は9月中旬に発行の予定である。
外国の associate editor 9名をきめたとの報告があり、会員以外の editor には雑誌を送ることが要請された。
前回の評議員会で問題にされた G. J. の別刷代金は、検討の結果200部均一の場合は外国なみに安くすることが可能であるとの報告があった。
「地球化学」は1973年 Vol. 7 が未発行であるが1974年 Vol. 7/8 合併号として発行する。その内容は報文2, 1973年討論会の課題討論10報とし全部で99頁となった。
- ・行事委員会
本会例会を本日(6月8日)「南極 Dry Valley」を課題として開催した。
今期の行事委員は倉沢 一, 杉村行勇, 長沢 宏, 半田暢彦, 半谷高久, 室住正世の各氏に依頼した。
- ・財政委員会
学会としての基本方針, 将来に対する目標をきめてほしい。その上で委員会として評論してゆきたいとの要

望が出された。

4. その他

GDP の連絡協議会が文部省に作られ、各研究機関より委員が指名された。
地球化学研究協会から昭和49年の第2回三宅賞受賞候補者の推薦依頼が学会宛に来ている。メ切1974年9月22日(本ニュース9頁参照)。

議 題

1. 1974年討論会について

10月1, 2, 3日の3日間学習院大学で開催。

2. 12月例会について

海洋化学関係を課題とする。開催地は未定。(後に名大に決定)

3. 会則改正について

役員選挙に関する会則を再検討するための委員会を作る提案があった。特に(1)評議員の選挙と幹事の選出をわけて考える, (2)評議員の交代を明文化する等を検討するため、会則改正検討委員会を作ることを決定した。委員長に本田副会長が選ばれた。

4. 地学関係総合欧文誌検討委員会について

第1回委員会が開かれた。学術会議が一次刊行物を発刊しないことになり、それにともなう地学関係の総合誌を文部省の経費で発行することを勧告することになった。そのために学会として(1)地学関係の欧文雑誌の発行を希望するか(2)どのような内容のものを望むか, (3)編集はどうするか等の点を11月初旬までにきめる必要があるとの説明があった(本田副会長)この件については本田副会長が編集委員会と相談し、問題点を整理して次回の評議員会に提案することになった。

5. 入退会について

正会員の入会申込者17名, 退会5名, 賛助会員の入会1件, 退会2件。
現在の正会員751名, 賛助会員17件になった。(10月1日現在正会員766名)

6. 編集財政の問題について

標記について種々意見の交換があった。

有機地球化学談話会1974年報告

本ニュース67号(1973. 12. 1)にお知らせした有機地球化学談話会は、地質学会、地球化学会の会員を中心として、両学会の開催期間中に小集いがひらかれ、すでに4回の会合が持たれた。本年は第3回地質学会(北海道大学)、第4回地球化学討論会(学習院大学)と2回開催されたので席上報告および討論された内容を簡単に報告する。

関連学会のニュース

1. 「生命の起源および進化学会」の設立に関して・北大 秋山雅彦
2. Geology and Stratigraphy of Carbon の国際学会. 1975年 モスクワ
3. 国際石油会議 1975年5月11日~16日帝国ホテル
4. シンポジウム“水中の有機物汚染物質の同定と分析” 1975年11月30日~12月5日メキシコ
Dr. L. H. Keith, Environmental Protection Agency, Southeast Environmental Research Laboratory, College Station Road, Athens, Georgia 30601
5. 第2回環境生物地球化学シンポジウム. 1975年4月8日~4月11日 カナダ
Dr. J. O. Nriagu, Department of the Environment; Canada Centre for Inland Waters, Burlington, Ontario L7R 4A6 Canada

討 論

第3回談話会(9月2日)

ケロージェンの生成について

地球化学討論会と日時が接近していたこともあり、出席者は少なかったが、東北大学の佐藤俊二氏から Kero-gen の分離法, 特徴, 成因, 石油生成との関係, ESR-Kero-gen 法などについて話題提供があり、活発な討論がおこなわれた。

第4回談話会(10月2日)

特に議題を用意していなかったで、前回の談話会で提案された“有機地球化学シンポジウム”開催の件および今後の会の活動等について討論がなされた。

シンポジウムに関しては具体案が提示され次のような大筋が決った。開催期日を1975年とする。内容は、“有機物に関連した水, fresh および Soft Sediment, 岩石, 化石の研究”についておこなわれる。シンポジウムの運営には北大の秋山氏があたられる。以上

談話会が発足して以来2年経過し、来年シンポジウムを開催できるまでになったことは日本における有機地球化学の発展の第二段階として大変喜ばしいことである。これまでこの領域の研究者が少いために、地球化学討論会席上でもまとまった位置に講演が配置されることが少なく、有益な討論ができないでいたが、このシンポジウムを機に多くの若手の研究者の活躍が期待されるであろう。会への参加を御希望される方は、名古屋大学水圏科学研究所、半田暢彦氏、東北大理学部田口一雄氏に連絡して下さい。 文責 小椋和子(都立大)

学 会 入 会 (正会員)

月日	氏 名	勤 務 先	専 門
1974 2/21	遠 山 英 一	沖縄県企業局 天願浄水場	有機化学
3/ 1	森 岡 正 名	東京大学アイソトープ総合センター	地球化学
3/11	服 部 和 夫	大阪府水道部水質試験所	植物生態学
3/14	高 橋 孝 宣	日本冷凍食品検査協会神戸研究室	分析化学
3/23	嶋 健 一	日本気象協会東海本部	海洋化学
4/11	掛 川 武 夫	福井県公害センター	薬学
4/25	田 中 邦 也	学習院大学理学部化学科	地質
5/13	服 部 恵 子	東京大学理学部地質学科	地質

5/15	大 出 茂	東京都立大学理学部研究科修士課程在学中	地球化学
5/18	尾 上 健 治	千代田ディムス・アンド・ムーア(株)	化学
〃	鹿 園 直 建	東京大学理学部地質学教室	鉱床学
5/24	武 田 洋 一	長野県衛生公害研究所	環境化学
1974 5/25	島 崎 英 彦	東京大学理学部地質学教室	金属鉱床学
〃	浦 辺 徹 郎	東京大学理学部地質大学院在学中	金属鉱床学
5/28	関 口 恭 一	群馬県公害研究センター	分析化学
5/18	Wenk, Eduard	Mineralogisch-Petrographisches Inst., Univ. Basel	鉱物学岩石学
6/ 3	Truesdell, A. H.	U. S. Geological Survey	化学地質学

日本学術会議広報委員会

第9期最後の総会は10月22～24日の間開催された。新垣義一（琉球大学）、緑間 栄（沖縄国際大学）の両教授がオブザーバーとして出席した。

（報 告）

会長の報告を承認した後、両副会長から所管事項の報告があった。とくに会長は、物価高騰にともなう補正予算提出に関して文部・大蔵事務次官との懇談結果について詳細に報告した。また伏見副会長によれば、ICSU 総会が各加盟ユニオンに対し以下のことを勧告した。そこでは各国で開かれる国際シンポジウム等を主催する組織委員会がその出席者の入国を文書で保障することを求めている。

学術体制委員会の「学術体制基本問題小委員会最終報告」については、その内容と異なる意見の掲載について意見の交換が行われた。また沖縄問題特別委員会の報告にかかわって、前記新垣琉球大学教授から沖縄問題に関する本会議の積極的な取組みについて謝意が表明され、拍手がわいた。

（提案審議）

第9期最後の総会にふさわしく、提案は多方面にわたった。また各提案に対しきわめて活発な審議が行われ、勧告11、要望1、申入れ2、声明1及び申合せ3の計18件が採択された。これらの多くは、原子力をはじめ国民生活に直接関する科学技術の開発に関する多面的な勧告・申入れ等である。

まず第9期の審議の取りまとめ『科学技術政策の基盤』（総頁数424頁）を全国の科学者に公表し、こんご検討を深めることを申し合せた。『「科学技術の基本的なあり方」について』の基本的な考え方を、広く科学者・技術者の討議に付するための「案文」として採択した。さらに「原子力安全の全般的な課題解決のために」（勧告）で、原子力開発の現状を憂慮し、原子力安全性確保のための必要な原則を明示したうえ、原子力の安全性を確保する課題の解決のため政府が本会議に協力を求めるよう、また本会議としては科学者と結び付いて政府の要請に全面的に協力する用意がある旨を勧告した。

国土問題については国民的合意と科学的計画性を求めた「国土問題に関する提言」を声明するとともに、地域

と産業技術の「開発に関する事前評価について申入れ、開発後の事態に対する評価のため種々の措置を求めることにした。また物価指数をあらわす方法を検討研究する常設の中立的な委員会を設けることを、「物価指数の改善のための体制整備について」の申入れで求めることにした。その他鉱物・生物資源とエネルギーに関する今後の研究の基本姿勢を提示した「資源エネルギー関係の研究体制について」及び「我が国における平和研究の促進について」多くの措置を求めたがこれらの勧告はいずれも、本会議の活動の拠りを示すものである。

学術情報・資料の効果的な利用体制に関して以下4つの勧告が採択された。すなわち「諸専門分野別の研究情報センター（仮称）の設置促進について」、「ヨーロッパ言語・文学研究資料情報センター（仮称）の設立について」、「人文社会科学系外国図書に関する大学共同利用図書館の設立について」及び地域問題に対する資料センターの設置を各地に求めた「地域問題及び地域計画学研究的の促進について」である。

科学者の待遇問題に関し、「国立・公立・私立大学研究・教育者の給与とその他研究・教育条件の大幅改善とリわけ格差は正について」（要望）、「定年制又は高令による大学退職研究・教育者の老後保障特にその研究・生活条件の改善について」（勧告）が採択された。その審議に際して、両案とも大学関係者に限定せず、国公立研究機関の研究者を対象とすべきであるという意見がのべられ了承された。

大学の研究・教育条件の改善に関し「私立大学助成に関する法律の制定について」の勧告案が上程され、大学以下の私立学校の場合も含めた表題に変えて採択された。また「人類遺伝学の推進と国立遺伝衛生研究所（仮称）の設立について」、「放射光総合研究所（仮称）の設立について」の2つの勧告を採択した。

第9期の最初の総会で問題になった「期の当初における会長及び副会長の選挙について」、10期会員当選者の選挙公報並びに日本学術会議法及び会則を事前に配布することを申し合わせた。

今総会の出席率は、第1日目から3日目まで、それぞれ85、83、83%であった。

国立極地研究所 地学専門委員会

昭和49年9月5日～7日の3日間、極地研究所・地学専門委員会が開かれた。南極地域の観測研究は昭和基地を中心にして、永年にわたって続けてきたが、昭和49年9月26日、国立科学博物館極地研究センターから発展的に改組され、全国の大学、研究所その他の極地研究関係者が利用できる独立の共同利用研究機関として発足し、所長は永田武となった。昭和基地も同時に、正式にこの研究所の附属施設ということになった。

さらに、近年、南極最大のオアシスで、ビクトリアランドの南部にあるドライバレ（Dry Valley）については、日・米・ニュージーランド3国共同研究計画の「ドライバレー掘削計画（DVDP: Dry Valley Drilling Project）」が進行しており、5月29日～31日にはアメリカのワシントン州シアトル市でセミナーも開催されている。

このように、新らしく発足した研究所としても、南極地域の観測研究の将来のビジョンについて、根本的に検討を加える必要性が生じた。そこで、南極地域の地学研究将来問題長期計画をまとめるために、地学専門委員会が開かれた。委員会は、広く南極の研究に関係している人々で構成されている。この会合でまとめられた計画案の概要をご紹介します。

I 南極地域の地殻および上部マントルの構造

- 1) 地殻およびマントルの構造の地球物理学的研究（人工地震、自然地震、重力、地磁気、地殻熱流量）
- 2) 上部マントル源物質の地球科学的研究（西南極を中心とする火山帯でのマントル源岩石団塊、先カンブリア岩層（東南極）貫くキンバーライト中のマントル源岩石団塊、岩石物性の研究）
- 3) 東南極大陸における先カンブリア岩層
- 4) 南極地域の中・古生代層
- 5) 新生代および中生代の火成岩類（中生代火成活動について、新生代火山岩類、新生代火山活動の活動史）

II 南極大陸の運動

- 1) 氷床とアイソスタシー
- 2) 海面変動と地盤変動
- 3) 地震活動と火山活動

4) “南極プレート”

III 基本図および主題図の作成

- 1) 地形図
- 2) 海 図
- 3) 主題図（地質、重力異常、地磁気異常など）

IV 地下資源の問題

V 氷床分域計画（IDP）

- 1) 大陸氷床の形態
- 2) 氷床表面層の air-ice interaction
- 3) 大陸氷床 boundary における interaction
- 4) 大陸氷床の挙動
- 5) 大陸氷床の水収支
- 6) Katabatic wind
- 7) 大陸氷床における物質輸送とその起源
- 8) 大陸氷床の分域構造
- 9) Ocean-Atmosphere-Cryosphere System の simulation

IV 環南極環境計画（AFP, CEP）

- 1) Air-Sea ice interaction （エネルギー、物質）
- 2) Air-Sea water interaction （ “ ” ）
- 3) 海水の分布と変動
- 4) 海氷と Biosphere
- 5) 南極海における水塊の生成と移動
- 6) 海水の運動と Biosphere
- 7) 海水の移動にともなう元素の動き
- 8) 光エネルギーによる物質代謝
- 9) 海底堆積物の形成と続成作用
- 10) 海底における微生物活動
- 11) 海流と潮流
- 12) 氷山の分布と変動
- 13) 海底物理学

VII 後期新生代の自然環境

- 1) 氷床の深層水の解析
- 2) 気候変動と氷床、氷河の dynamic response
- 3) 海底堆積物の解析
- 4) 極地環境下の地形
- 5) 気候変動の simulation
- 6) 南極の気候変動と人間活動
- 7) 気候変動の因子
- 8) 大陸氷床の生成と変遷

VIII 研究体制の問題

A 国内の体制

1) 資料整理の問題 (資料の収集, 資料研究機器の充実)

2) スタッフの充実

B 南極での輸送の問題 (船, 航空機)

C 基地

1) 昭和基地の拡充

2) 衛星基地の設置 (Enderly 又は Yamato Mts.)

3) 新基地の設置 (Robert English Coast 又は Laasitter Coast)

D 地学としての“定常観測のあり方”

1974 年度地球化学協会学術賞 (三宅賞)

1974 年度三宅賞の第 2 回受賞者は本田雅 健 東 大教授 (地球外物質中の核反応生成物に関する研究) に決定し, 12 月 4 日 (水) 霞が関ビル 33 階東海大学校友会 館において, 授賞式および記念講演会が開かれた。

その業績の内容は次のようなものである。本田雅健教授は, 分析化学, 地球化学, 宇宙化学の領域において, 多くのすぐれた業績をあげているが, とくに最近約 15 年間にわたって行われた地球外物質中の核反応生成物に関する研究は高く評価されている。地球外物質中の微量の同位体を正確に測定するための分析法, とくに化学分離法, 放射能測定法, 質量分析法を確立して, これを地球外物質に適用している。その結果, 日のケタから 10^9 年に及ぶ半減期をもつ各種の放射性核種を分離定量することに成功した。またカリウムからマンガンに至る領域の元素の長寿命ないし, 安定同位体の存在度の変動を追求した。隕石試料に対しては, 10^9 年にさかのぼる銀河宇宙線の効果, 月試料に対しては, 10^7 年以上にわたる太陽宇宙銀河線の影響などが明らかにされ, 各宇宙線の消長と, これら地球外物質の歴史について貴重な情報が得られた。

これらの研究は, 最近の宇宙化学の研究の中で, すぐれたものの一つと言うべきであり, その国内および国外における評価はきわめて高い。(なお, 第 1 回の同賞受賞者は北野康名大教授「炭酸塩堆積物の化学的研究」であった)

学会事務所 (166) 東京都杉並区高円寺北4-35-8
気象研究所 地球化学研究部
電話 (03) 337-1111 内線 75
振替口座 東京 38679
日本地球化学会

ニュース (213) 川崎市高津区久本135
発行所 地質調査所 地球化学課
倉 沢 一
海洋地質部
松 本 英 二
電話 (044) 866-3171

日本地球化学会ニュース

No. 72. 73

1975. V. 10

国立国会

10. 7. 26.

図書館

選挙公示

日本地球化学会 1976・1977 年度役員選挙 の立候補者および推薦候補者の届出について

1975 年 4 月 5 日

日本地球化学会役員選挙管理委員会

本会会則により, 1976, 1977 年度役員の選挙を次の日程で行ないます。

立候補者・推薦候補者届出×切 7 月 31 日 (必着)
選挙公報・投票用紙・会員名簿発送

8 月 25 日

投票×切 9 月 30 日 (必着)

選挙結果公表 (総会) 10 月 24 日

つきましては, 下記により, 会長, 副会長, 評議員に対してそれぞれ立候補者および推薦候補者の届出をしていただくようお願いします。

1. 会長 1 名, 副会長 1 名, 評議員 20 名を選出します。

2. 立候補者の届出は, 届書を立候補者自身が, i) 本委員会に持参するか, または ii) 本委員会宛に送付してください。

3. 推薦候補者の届出は, 推薦候補者名と推薦者名を記した届書に, 推薦候補者の承諾書をそえて, 推薦者またはその代表者が i) 本委員会に持参するか, または ii) 本委員会宛に送付してください。

4. 第 2 項と第 3 項に記した以外の方法で届出が行なわれた場合には, 届書をうけつけることができません。

5. 郵送の場合は「書留郵便」としてください。届書の封筒の表に「選挙」と書き入れてください。

6. 届出の×切は, 1975 年 7 月 31 日 (必着) です。

7. 本委員会の所在地は, 東京都杉並区高円寺北 4-35-8 気象研究所地球化学研究部内 (☎166) です。

新名簿発行のため, 住所および勤務先変更のかたは, 至急, 学会事務所へご連絡下さい。6 月 30 日を×切とします。